

多様性が尊重される社会をつくるために

マジョリティ・マイノリティという考え方を理解することは、多様性が尊重される社会の実現とどのように関わるのでしょうか。この問題について研究を続ける出口真紀子先生にお話をうかがいました。

「多様性」を考えるときに

多様性が尊重される社会をつくるには、まずマジョリティ側の人々が自分のマジョリティ性とそれに付随する「特権」に気づくことが大前提です。私たちは、「多様性」と聞くと、マイノリティを思い描きますが、実はマジョリティもその一員であることにまず気づくべきでしょう。では、マジョリティとマイノリティはどこが異なるのか。それは、マジョリティは、属性において「労なくして得られる優位性」すなわち「特権」をもっている点です。でも、多くの人は「自分は特に優遇などされていない」と感じているのではないのでしょうか。

例えば、自動販売機や電車の改札機などが右利きの人が使いやすいように設計されていることについて、右利きの人は気づいていないことが

多いと思いますが、左利きの人は不便さを感じたり、それを使用するたびに「右利きの人に対して配慮がなされている」と実感したりしていることが多いでしょう。右利きか左利きかは、いわば生まれつきのもので、そのようなたまたま与えられた属性によって、必要とされる苦労や努力が異なってくる。この違いこそが、両者の間の“力の非対称性”です。

この社会は、マジョリティへの合理的配慮のもと、つくられているため、マジョリティは気づかないうちに、さまざまな生きやすさを手に入れています。それらが、マジョリティにとっての「普通」「当たり前」になると、同じ社会構造の中で、マイノリティが多くの苦労や生きづらさを抱えて生きていることに対して、「私のようにがんばればできるのに」「なぜ不満ばかり口にするのか、まずは努力では？」とマイノリティの側にいる人々の資質や姿勢を問題視しがちです。でも、もともとの生きづらさの原因は構造にあるのです。

マジョリティにできること

マイノリティが尊重される社会をつくるには、今の社会を構造から変えるため、より権力をもつ側であるマジョリティには、「アライ (ally)」*として、変革のために行動してほしいと思います。

まずすべきなのは、マイノリティがどういう点に生きづらさを感じているのかに耳を傾けることです。それによって初めて、この社会の構造的な不公正への理解が深まります。

特権をどう使うか

マジョリティが特権をもつことは決して悪いことではなく、特権をもつことを恥じたりする必要はありません。ただし、その特権をどう使うのかが問われます。たまたま自分の属性が優遇された社会に生まれて「ラッキー」で終わるのか、特権を使ってより社会が公正になるために変革を促す側に回るのかは、皆さん自身が決めることです。

特権をもつことは、さまざまな選択肢をもつことであります。あなたがもしマジョリティなら、その特権を何のために、誰のために使うのか、一度、考えてほしいと思います。

※マイノリティ側の人々の味方となって、寄り添い、連帯するマジョリティ側の人々を「アライ (ally)」とよぶ。



出口真紀子

Makiko Deguchi

上智大学外国語学部英語学科教授。専門は文化心理学。アメリカで長く生活した経験から、文化変容のプロセスについて研究を行う。また、日本社会から差別をなくすため、マジョリティ・マイノリティの差別的な心理について研究を行っている。光村図書小・中学校教科書の人権および人権教育に関する校閲を務める。